
魔法少女リリカルなのはStrikerS ～ 転生したら魔法？がある世界だった～

D-5

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers ～転生したら魔法？がある世界だった～

【Nコード】

N9643W

【作者名】

D-5

【あらすじ】

空から落ちてきた豆腐の角に頭をぶつけ死亡した男。しかも記憶喪失というオマケ付き。

彼は神のミスによって死亡したのでお詫びに転生することになった。でも転生した世界には魔法というものが存在していた。

「よし、魔法つてのがどんなものかは理解した。でもな、砲撃や殴る斬るは魔法なのか？」

これはそんな彼が新たな世界で生きていく物語である。

プロローグ（前書き）

初めましての人は初めまして、そして知っているという人はこんにちはわ。どうもD・5です。

今、書いている作品があるのに何をトチ狂ったのか新しい小説を始めることになりました。
初の転生物なので少々不安ですが。がんばっていきますのでよろしくお願いします。

ではどうぞ。

ブローグ

「サーセンしたぁーーーーー！」

「は？」

ふと、目が覚めると真っ白な空間で茶髪のチャラ男が土下座していた。見事な土下座だな、どれ、そこにあった石の板を乗せてみよう。

「何が？」

「つて、ナチュラルな反応しながら石を乗せないでください！」

「いや、見事すぎる上にすぐそばに拷問器具があったら誰でも使いたくなるだろ？」

「なりませんよ！」

む、そうか……。残念だ。

「で、お前は何を謝っているんだ？」

「す、すみません！わ、私の失敗であなたを死なせてしまいました
！！」

随分と礼儀正しいチャラ男になって……。え？

「死んだ？俺が？」

「は、はい……………」

「はぁ——————？！」

真っ白な空間に俺の声が木霊した。

「落ち着きましたか？」

「ああ」

実際は混乱しているがな。

「で、何故俺は死んだんだ」

「説明させていただきます。事の始まりは……………」

「長すぎるは却下だ、三行以内にしろ」

「……………簡単に言うと

・パソコンで人間の情報を確認していた

・その時くしゃみをしてしまい間違つて貴方のデータを消去して
しまった

・貴方は死亡した

ということになります」

「うん、ツツコミ所はいろいろあるがまずは言わせる。バックアップくらい取れよー!」

「え、ツツコムところはそこっ!? 普通は書類じゃないのかよ、とかじゃいんですか!」

「紙媒体は時代遅れだ!」

「うわー」

まったく仕事してるんだったらバックアップくらい取れよ。

「で、俺の死因は何なんだ。事故死か、それとも他殺か?」

「え、えっと・・・・・・・・・・」

何を口籠っているんだ、コイツは。

「さっさと言え」

「は、はい死因は・・・・・・・・豆腐の角で頭を打って頭部が破裂したことです」

「・・・・・・・・・・はい?」

豆腐だと?

「実は、貴方が立っていた場所の遙か上空でスカイダイビングをしている人たちが『飛びながら豆腐は食えるのか!』という実験をし

てまして……上空からの落下して付いた速度が破壊力に変わり、その下にいた貴方の頭を……」

「木っ端微塵かよ……」

「はい……」

まさか、豆腐の角で死ぬなんて漫画でもありえねえぞ。てか……

「スカイダイビングしながら豆腐食うんじゃねえ—————
!」

はぁ……それよりもだ。

「お前誰？」

「今更!？」

「そして俺は誰だ？」

「そしてかなりヤバいことになっていた!？」

「なるほど、神か……信じられんな」

「そうですね、同窓会で久々に会った友人たちによく言われま
すよ」

まあ、どっからどう見てもチャラ男だしな。日サロやめたらいいんじゃない？

「あ、これ地です」

「そうか……………」

色黒なんだな。

「で、俺はどうなるんだ。このまま三途の川行きか？」

「いえ、ミスで貴方を死なせたとはいえ寿命がかなり残っていたので、このまま転生してもらいます」

「転生？てか後寿命どん位残ってたんだ俺？」

「確か、後……………百二十年くらいですね」

「ながっ!？」

「ええ、人間の長寿記録を軽く塗り替えてますね。しかも死亡直前までバク宙ができるくらい元気な老人になる予定でした」

「スゲーな俺!？」

死んだのが何歳なのかは忘れたが、普通はボケてベットのうたで妖怪か俺は。

「まあ、それはどうでもいい。で、転生ってどういうことだそのま

ま生き返れるのか？」

「いえ、天界のデータベースから貴方の情報は一切無くなってしまいましたので元の世界へ生き返らせるのは無理です。できたとしても……。」

「ああ……。」

頭が木っ端微塵だもんな……。生き返った直後にまたお陀仏だよ。

「ということで別世界に転生してもらいます」

「別？」

「はい、あなた方の世界というアニメの世界ってやつです。しかもバトルもの」

「ほう……。」

つまり戦闘がある世界なのか。

「オマケに能力も付けましょう。残っていた寿命分の力を」

それってかなり凄いいんじゃないか、百二十年分だし。

「どんなのがいいですか？超人的な力やどんな問題でもどんなことでもできる天才的な知能と才能何でもありますよ」

「いや、どんなのがいいと言われても記憶が無いしな……。」

生前の俺はオタクなのかもわからんし。

「ああ、そ、そうでしたね……………では、ランダムに決めましょうか。はっ！」

チャラ男が手の前にかざすと煙と共に何か出てきた、あれは……………ルーレット？

「そうですダーツは一本、寿命十年となります。貴方の寿命分だと十二本ですね」

「お、おう」

十二本のダーツを渡される。ダーツなんかやったこと無いぞ……………多分。

「では、どうぞ！」

とりあえず投げてみるか……………二本同時に。

「よっと」

ストトッ！

「い、一気に投げますか……………えーと、おお！いいのに当たりましたね」

「そっなのか？」

「ええ！」

ふむ・・・まあそういうならいいものだろう。

「それでは後十本ですよ！」

「・・・いらね」

「え？」

「いらねえよ。有利になる力がありすぎると人生がつまんなくなる」

困難があつてこそその人生だ。

「で、でも、残りは・・・」

「ああ・・・一本は金運に使ってくれ。残りはそうだな・・・」

どうするか・・・。

「俺の家族はどうなってるんだ？」

「か、家族ですか？妹さんが一人だけです、ご両親は・・・既に他界してますね。随分と大変だったみたいですね。兄妹二人だけで必死に生きていたみたいです」

「そうか・・・」

妹がいたのか・・・だったらくらこう使うか。

「なら残りのダーツは全部妹に使ってくれ」

「へ？い、妹さんにですか？」

「そうだ、妹にだ。足りないか？」

「い、いえ、全然！」

だったら良かったぜ。

「じゃあ、それで頼むぞ」

「え、あの？本当によろしいのですか？」

「構わなねえよ」

「………わかりました、残りのダーツは妹さんの幸福にまわします」

「それでいい」

これだと思い残りはねえ。

「それでは転生してもらいます」

「おう、頼む」

「はっ！」

ガシヨンッ

「ん？」

何故俺は固定されているんだ？そして何だ、あの大きな大砲は。どう見ても戦艦の主砲じゃないか。

「それでは、いい来世を！」

「ちょっと待て！まさかこのまま」

「てえーーーーー！！！」

「やっぱりこうなるのかよチクショーーーーーッ！！！」

チュドーン！

俺の目の前は真っ暗になった。

「まったく面白い人ですね．．．．．前に来た男に比べたら雲泥の差ですよ」

残ったダーツを中に浮かべ見つめる。

「これ一本があれば世界を救うほどの奇跡の力があるというのに．．．．．」

ダーツを粒子に変え消す。これで彼の妹さんは世界でもっとも幸せになれるだろう。

「ですがこれでは私のポリシーに反しますね」

私のポリシーは生まれ変わる人間に最高の幸せを送ることだ。だが彼はそれ断ったのだ。

「彼の意思には反しますが、これは私からのプレゼントですよ」

懐から一本のダーツを取り出す。それをルーレットに投げる。
サクッ！

「ふむ・・・まあまあですかね」

あの世界だつたら役に立つ力だろう。

「さて、幸せになってくださいね さん」

「おぎゃあーーーーー！」

「あらあら、起きちゃったの？」

え？ちょ、ここはどこだ？そして体が動かせねえ！

「おしめではないし・・・お腹が空いたのから？なら・・・」

む、なんだ、この口に当たるものは。

「あれ？違うの・・・だったら何かしら」

むう・・・よく見えんな。どうなっているんだ俺の体は。

「今度は大人しくなった・・・おしめでもないしおっぱいでもない・・・ふふ、よくわからない子ね、でも可愛いわ」

・・・さつきから聞こえるおしめやおっぱいという単語、まさかだが・・・俺。

「私の愛しいヴィント」

赤ん坊になつてるのかぁーーーーー!？

「おぎゃーーーーー」

「あ、あらあら？今度は何かしら」

こうして俺の新たな人生が始まったのであった。

プロローグ（後書き）

こんな感じです。今回はプロローグなので短いですが。次回からはできれば五千文字位で書けたらいいと思います。

更新は他に書いている作品もありますので交互になると思いますのでご了承を。

では、こんな未熟な作者ですが精一杯書いていきますのでよろしく
お願いいたします。

欲しいとは言った、だがやり過ぎだろう。これ……（前書き）

書きあがったので投稿します。

欲しいと言った、だがやり過ぎだろう。これ……

やあ、新しい人生を謳歌している豆腐の角で頭を打って死に転生した男、ヴェント・カグラだ。今俺が思ったことを言おう、それは……

やり過ぎだチャラ男——————！！

この世界に生まれて早七年……え？その七年の間はどうしただつて？ハハハ……言えるわけないだろう、俺にとって黒歴史なんだよあの時間はおしめを変える時や食事の時間のときは。これ以上は喋りたくないんだよわかるか？

まあいい、話を戻そう。あのチャラ男やり過ぎだ、確かに俺は金運が欲しいと言ったがさすがにこれはやり過ぎだ。

俺が生まれたカグラ家は一般的な中流家庭だったのに、俺が生まれた途端……

・宝くじが当たった、金額は良く知らんが一等から五等まで総なめ、かなりの大金だったらしい。

・その金を元に会社を始めたら大成功。

・今やその業界を代表する大企業となった。

な、やり過ぎだろ。俺が言ったのは生活する分に困らない程度のお金運が欲しいって言ったんだがな……まあ、会社が成功したのは多分母さんの手腕のおかげなんだろうけどな。

「どうしたのヴェント、ため息なんてついて、何か悩み事？」

「うっん、なんでもないよ母さん」

この世界の俺の母親、シルフィーヌ・カグラ（2ピー）歳・・・年はこのとおり言えないが一児の母とは思えないくらい的美貌を持つ人だ。てか、どつからどう見ても中学生にしか見えないんだよな・・・俺の親父はロリコンだな、うん。

ちなみに父親の顔は知らん。前に一度聞こうとしたら・・・。

「父親ね・・・いるんじゃないかしら。どつかに」

と言われた。その時の母さんの身体からは凄まじいほどの怒気が溢れ出ていた。

後に母さんの友人から聞いた話なのだが、俺の父親は俗にいうヒモというやつらしく、世界中に女を作っているんな所を転々としているらしい。・・・ヒモでロリコン、最悪だな。

「あ、ヴェント、そろそろ学校に行かないと危ないわよ」

うおっ、もうそんな時間か。

俺は残ったトーストを口に詰め込み、カバンを持ち玄関へ向かう。

「じゃあ、いつてきます」

「はい、いつてらっしゃい」

母さんに手を振り外に出る。さて、行くか学校に。

さてここで俺が転生したこの世界で一番驚いたことを教えよう、それは・・・。

魔法というものが存在するのだ。

最初は信じられなかったさ、だが母さんに実物を見せられて信じざろうをえなかった。

このミッドチルダという世界は魔法文化によって発展した世界だ。母さんの会社もこの魔法文化があるから成り立っているらしい。魔法を使うためのツール、デバイスという物を作っているらしい。原理はよくわからないが、そのおかげで生活できるんだ、ありがたい事だ。

そして俺が住んでいるのはミッドチルダ首都、クラナガンだ。ここクラナガンには時空管理局ミッドチルダ地上本部がある。え？時空管理局ってなんだだって？そういえば説明してなかったな。

時空管理局、いくつもある次元世界、つまりこのミッドチルダと同じような星からロストログアという危険物の規制と質量兵器の根絶を目標とした組織だ。

簡単に言うと次元世界の警察みたいなもんだ。その本部がここにあるのだ。

「おっはよー少年」

「む、おはよう」

学校までの道のりの途中、青い髪の女性と厳ついおっさん……男性に話しかけられた。

「おはようございますクイントさん、ゼストさん」

青い髪の女性の名前はクイント・ナカジマ、おっさんはゼスト・グライツ。先ほど説明した管理局の局員だ。そして母さんの旧友らしい。

「相変わらず礼儀正しいね、あの子とは大違いだわ」

「お前はもう少し落ち着きを持て。ヴェントを見習え」

「ちよっ！それは酷いですよ隊長」

相変わらず賑やかな人だなクイントさんは、そしてこっちも相変わらずダンディーだなゼストさん。

「あの学校がありますので行っていいですか？」

「む、ああ、引き止めてしまつてすまん」

「いいえ、大丈夫です。それでは・・・」

「うむ、行つて来い」

「いつてらっしやい」

二人にお辞儀をしてその場を去る、これも朝の日課だ。この時間に来るといつもあの二人がいる、どうやらパトロールコースと重なっているみたいだ。

まあ、そんなことよりも学校に行かなければな。時間も危ないし

少し走るか。

足に力を入れて地面を蹴り前へ出る。さて、間に合えばいいのだから。

「ふう……間に合ったか」

走ること十分、閉門五分前だ。どうやら間に合ったみたいだな。走るのを止めて歩きに変える、朝から無駄な体力を使ったな。む、後ろから何か来るな。

「おっはよー！ー！ヴェン……とうっ！！」

「……………（ヒョイ）」

「つて、あらあゝゝ？！」

いきなりとび蹴りをかましてきた馬鹿を避け、馬鹿は勢いずいたまま地面を滑っていった。

「……………行くか」

「待てよ！」

「何のようだ力カオ、朝から傷になって」

「お前が避けるからだろう！」

朝からうるさいやつだ。コイツはカカオ・ココナッツだ。特徴は馬鹿、以上。

「もうちょっとマシな説明しろよ！」

「うるせえ、事実だろ」

「何を！天才の俺様に向かって馬鹿とは何だ！」

「 2×5 は？」

「7！」

「馬鹿だ、コイツ」

「何故だ！？」

足し算と掛け算を間違えてる時点で馬鹿なのは確定だろう。

「お、俺様は戦闘の天才なのだ！」

「その天才のとび蹴りは簡単に避けられるのだが」

「・・・・・・・・・・・・・・・・（・・）」

相手するのも面倒だし放っておくか。

「ちょ、ちょっと待てよヴェント！」

うるさい、着いてくんな。

「ん？あれは……」

授業も終わって帰ろうとしたとき見覚えのある顔が校門の前に立っていた。

「ん？どうしたヴェント、敵か」

「黙ってる馬鹿」

「なんだとー！ー！」

あいつが待っているってことは母さんが、メールくらいくれよな、まったく。

「じゃあ、俺帰るわ」

「え？ちよつ、ヴェント！？」

カバンを背負って校門へ向かう。馬鹿が何か言っているがどうせ大したことは無いだろうし、先を急いだ。

「どうしたクラウド」

「これはヴェント様、お帰りなさいませ」

俺に頭を下げる初老の男性、彼は母さんの会社の専属運転手のクラウドだ。母さんが俺を会社に呼び寄せるとき、いつも迎えに来るのだ。

「また母さんが？」

「はい、社長が呼びです」

「わかった」

「では、どうぞ」

クラウドがリムジンの後部座席のドアを開け、俺は乗り込む。てか、いつもリムジンで来るなって言ってるのにな、邪魔になるだけなのに。

「では参ります」

エンジンに火が入りリムジンはゆっくりと動き出した。今日は何の用件なんだろうな、実験でもないだろうし……。まあ行けばわかるだろう。

俺は窓から見える景色をただ眺めるのだった。

会社のビルに着いたらクラウドに礼を言って、社長室に向かう。

「来たよ母さん」

「いらっしやいヴェント、ごめんね急に呼び出したりして」

「いいよ。で、今日は何？」

「あ、今日はね」

「やつほーヴェント君。今朝ぶり」

「クイントさんにゼストさん？」

なんでこの二人がここにいるんだ？

「仕事ですか？」

「ああ、デバイスのことだな」

なるほどそういうことか。うちの会社はデバイスの開発・研究を行っている会社だ管理局にもうちのモデルが配備されているらしい。

「ん？だったら何で俺は呼ばれたの母さん」

「ああ、ヴェントには悪いんだけどクイントの相手してくれない？
ちよつと煩くて困るのよ」

はあ・・・またか。

「ちよ、ちよつとシルフィ私が相手するんじゃないで、相手しても
らうの！？普通逆でしょ」

「だってクイントちゃん。さっきから全然落ち着き無かったじゃない、話聞いてなかったし」

「うぐっ！」

「それにお前よりもヴェントのほうが落ち着いているところがあるしな」

「た、隊長まで……」

ガツクリと頭を落とすクイントさん。仕事なんだからもっと真面目にやれよ局員。

「い、いいわよ相手になってやろうじゃない！行くわよヴェント君！」

「わかりました。母さんテストルーム借りるね」

「いいわよ。今なら二番が空いているから、母さんが連絡入れておくわね」

「ありがとう」

クイントさんに引つ張られて、社長室から出る。すると頭の中に声が響いた。念話か……。

念話って言うのは一種のテレパシーみたいなものだ。魔法の初歩で素質のあるものだったら誰でも使えるらしい。

『ヴェント、わかっているだろうけど』

『わかってるよ、アレ（・・・）は使わないよ』

アレ（・・・）、俺が転生する際に得た、能力のことだ。母さんはそれを管理局には隠しておきたいらしい。何故かは知らんが母さんが言うのだからそうしたほうがいいのだろう。

『そう、ならよかったわ。怪我には気をつけてね』

『それはクイントさんに言って』

『フフ、そうね。じゃあがんばって』

母さんはそう言うと言話を切った。クイントさんに引つ張られて第二テストルームにたどり着く。ここはできたばかりのデバイスのテストをする場所でかなり頑丈な部屋で俺もよく使っている。

「さーで、どれだけ強くなったか見てやるわ」

「お願いします」

トレーニングウェアに着替えた俺は構えを取る。同じくウェアに着替えたクイントさんも構えを取った。

何をするのかというと格闘の稽古だ。俺は護身術程度に武術を始めたのだが、時折クイントさんに稽古をしてもらっているのだ。クイントさんはシューティングアーツという格闘技法の使い手だ。実際まだ一度も勝ったことは無い。

「さあ、かかってきなさい」

「・・・・・・・・・・いきますっ!!」

地面を蹴り俺は跳んだ。

「うん、かなり良くなったわね」

「ゼー・・・・・・・・ゼー・・・・・・・・」

く、くそ・・・・・・・・全然有効打が入んねえ・・・・・・・・。体格差もあるけど、やっぱりこの人強いわ・・。

「死角から入ってくる攻撃もいいけど、もうちょっと絡め手を用意したほうがいいわね。あと攻撃がまだ直線的だったわよ」

「は、はい・・・・・・・・」

まだ直線的だったか畜生、だいぶマシになったつもりだったんだけどな。

「でも前見た時よりもかなり上達してたわよ。これからも頑張りなさい」

「はい」

はあ……訓練メニューの見直しだな。

「ヴェント君も強くなったわね。十歳になったらこれに出れば？」

ん？何だこれ？

クイントさんが出した投影型のウィンドウには『―ディメンジョン・スポーツ・アクティビティ・アソシエーション（DSA）公式魔法戦競技会』と書かれていた。

「何ですかこれ？」

「あら？知らないのかしら、この大会はね昔私も出たことのあるんだけどかなり大きい大会でね。色んな管理世界から魔術師が集まってね互いに己の技量を競い合うのよ。あゝ懐かしいわね。メガ―又とシルフィとの青春の日々」

「へーそうなんですか。まあ出るつもりも無いんですけど」

「え？そうなの」

「はい」

あまり目立ちたくないしな、それに武術だって護身術にと思ってやってるからな。

「そう、残念ね。まあ出たくなったらいつでも言ってね」

「はい」

出るつもりは無いが頷いておこつ。

「おい、クイントそろそろ戻るぞ」

話しているとゼストさんがテストルームに入ってきた。

「あ、隊長。待っててくださいすぐに着替えてきますから」

急いで更衣室に向かうクイントさんを俺達は見送くとゼストさんが話しかけてきた。

「ヴェント君、クイントのことを頼んですまなかったな」

「いいえ、稽古をつけてもらったのでいい経験でした」

「そうか」

厳つい顔して結構優しいんだよなこの人。クイントさんが言うにはかなり強い騎士みたいだけど、戦ったことが無いからわからないが。

「お、お待たせしました・・・」

本当に急いで着替えたみたいで髪もボサボサなクイントさんが部屋に入ってきた。制服の上なんかボタン掛け違えてるし。

「はあ・・・身だしなみくらいしっかりしておけ」

「え？あ、すみません・・・」

相変わらず慌しい人だな。

「では失礼したな」

「次ぎ会うときも楽しみにしてるわよ」

「はい、クイントさんありがとうございました」

テストルームから出て二人を見送る。ロビーまで行きたいところだがトレーニングウェアのままだしな。

「ではな」

「じゃあね」

二人が見えなくなった。さてまだ時間はあるし、もうちょっと身体を動かしておくか。

次こそはクイントさんに有効打を当ててやる！

欲しいとは言った、だがやり過ぎだろう。これ……（後書き）

書きあがったのはいいんですけど特にナカジマ姉妹が来た年やクイントたちがいなくなる事件の年が。

次回の更新は少し遅れるかもしれませんが。

では次回の更新で。

決心はついた。だが……奴らとは関わりたくないな、マジで。

（前書き

息抜きにちよつと書いていたら、書きあがってしまった……まあいいか。

決心はついた。だが……奴らとは関わりたくないな、マジで。

時が過ぎるのは早く俺は十歳になった。アレから三年間特訓し、武術の進歩もかなりあり近所にあるストライクアーツの道場で相手になる人物は数える程にしかない、そろそろクイントさんに有効打を当てられると思っていたのだが……それは叶わなくなった。なぜなら……。

「何で……死んじゃったのよクイントちゃん!!」

クイントさんが死んだ。それは突然やって来た連絡で分かったことだった。

「……………」

棺桶の中で静かに横たわるクイントさん、肌は土気色になっていて微動だにしない。信じられないが死んでいるのだ。

「う、うう……………」

棺桶に縋り付き泣いている母さん。俺は母さんが泣いている姿を見るのは初めてかもしれない。

「クイントさん……………」

また、稽古してくれるんじゃないかったのかよ。俺強くなったと思うんだぜ。

心の中でそう語りかけるが、誰も答えてはくれない……………。

「・・・・・・・・・・」

死んだのはクイントさんだけではない、彼女が所属する部隊が全滅したそうだ、つまりゼストさんもだ。

さらにメガー又さんという母さんの友達も行方不明らしい。メガー又さんは俺も何度も会ったことがあったので覚えている。しかも三歳の娘さんがいたはずだ。

「グスツ、グスツ・・・・・・・・！おかーさん・・・・・・・・」

「う、うう・・・・・・・・！」

「・・・・・・・・・・」

クイントさん、子供いたんですね。なんで話してくれなかったんだろな・・・・・・・・でも理由はもう聞けないか。

「クイントさん・・・・・・・・」

俺は持っていた花をクイントさんのそばに置き。

「さようなら・・・・・・・・」

別れを告げたのだった。

「ねえ、母さん」

「何？ヴェント」

クイントさんの葬式の帰りの車の中、俺は決意したことを母さんに告げることにした。

「俺、管理局に入りたい」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

何も言わない、怒っているのか呆れているのかは分からないな。

「そう・・・・・・・・でも何で？」

「クイントさんの姿を見てそう思った・・・・・・・・」

「クイントちゃんの？」

「いや、正確に言えばクイントさんの家族の姿が」

クイントさんの遺体に縋り付き泣く小さな女の子と必死に涙を堪える姉と思える女の子、そして悲しそうにしているクイントさんの旦那さんのゲンヤさん、その三人の姿を見てとても苦しくなった。

人の悲しそうな顔を嫌になった。見たくは無いだからもうそんな人が出ないように守っていききたい。それを母さんに伝えた。

「そうなの・・・・・・・・フツッ、やっぱり私の子供ねヴェントは」

「え？」

どういうことだ？

「母さんも管理局にいたの知ってるわよね」

「うん、確か技術部だったよね？」

「そうよ、私にはヴェントと違って魔法資質は無かったからね。やれるとしたら得意のデバイス弄りくらいだったからね」

そうだったのか。で、今はその時の経験を生かしてデバイスの会社の社長か……。

「でも、なんで管理局だったの？デバイス弄るなら民間の会社もあったのに」

「それはね、お母さんは人助けがしたかったの」

「人助け？」

「そう、昔目の前でビルの爆発事故が起きてね爆発に巻き込まれて死んだ親の前で泣いている子供の姿を見たの」

母さんは淡々と語っていく。

「その子の周りは火に囲まれていてね誰も助けにいけないかったのよ。私はその泣いている子供の姿を見ているだけで心が苦しくなった。助けたいと思ったの、でも助けられない……」

「その子はどうなったの？」

「無事助けられたわよ、管理局の救助部隊にこの時なのよ私が管理局に入ろうと思ったのは。管理局に入れば誰かを助けられるあの子の流した涙を見ないで、泣かせないですむって。変な話でしょ？」

でもね、お母さんはたとえ力が無くても自分のできることをやることで人助けができるって信じていたから管理局に入ったの」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ヴェント、母さんはあなたが管理局に入りたいつて言うなら止めないわ、でも・・・・・・・・」

母さんは俺を抱きしめた、その腕は少しだけ震えていた。

「絶対に帰ってきてね・・・・・・・・あなたのクイントちゃんみたいに・・・・・・・・いなくならないでね」

「うん・・・・・・・・絶対に帰ってくるよ、母さん」

強くなる、そして守れるようになってみせるよ母さん。

それから二年、俺は取り合えず魔法学校初等部を卒業した。この二年は管理局員になるため魔法の修練、勉強などと大忙しだった。後母さんの薦めでデバイスマイスターの資格を取るための勉強をした。

この資格はデバイスの整備や製造に必要な資格なのでとっておいて

損は無いと言われた。

時の流れは早いな……毎日が濃密過ぎてマジでそう感じるよ。

でもおかげで……。

「本校の試験をクリアした諸君等を歓迎します」

おかげで俺は陸士訓練学校に合格したのだからな。

「管理局員武装局員としての心構えを持って平和と市民の安全のための力となる決意をしかと持って訓練に励んでください」

ザッ！

「はいっ！」

壇上上がっている訓練校の校長に敬礼をする。

「以上、解散！一時間後よい訓練に入る」

「はいっ！」

これから始まるんだ。

「えーと二十七号室か……っと、ここだな」

訓練校は寮制だからね相部屋は当然だ。さて、どんなやつがルームメイトなんだろうね。ちなみにルームメイトだからって訓練のパートナーというわけではないようだ。

コンコンッ

「失礼する俺は………」

「うふふ……私といいことしましょうよ」

「は、放せ！俺にそんな趣味はない！」

ボタンッ！

「………目がおかしくなったのか？今、馬鹿の姿が見えたような。それに図体のかいオカマが……部屋は間違えていないな。」

ガチャ

「………」

「ヴェ、ヴェントか！た、助けてくれ！」

「あら？こつちもいい男………」

「うわぁ、こつちに気づきやがった、このオカマ。」

「おい馬鹿、何でここにいる」

「ふ、ふふ……それは永遠のライバルである俺がいらないとお前が寂しいだろうと思ってな……わざわざ陸士学校に入学してやつ………」

「うるせえ」

「うばぁ!？」

「いやん、ワイルドな人」

一発殴っておいた。

「いちいち殴らないで！結構痛いんだよ！」

「本気でやってるからな」

「ヒドッ!？」

「クールなのもいいわん」

はぁ……コイツとオカマがルームメイトなんて最悪すぎる
だろ。てか、なんで合格できてるんだよコイツ。筆記テストはかな
り難かったはずだぞ。

「ふっ……天才の俺様に不可能は無い！問題なぞ全てこの鉛筆
サイコロでやったのだ！」

「……………」

頭が痛くなってきたよマジで。

って、時間やばいな、後十分で集合じゃねえか。

「おい馬鹿にオカマ。準備しろ」

「え、準備って?」

「誰がオカマじゃい!」

「後十分で集合だぞ」

「ぬおっ!?!マジかよ!」

「あら?急がないとねん」

急ぎトレーニングウェアを持ち更衣室に向かう。この三人で過ごすのかよ……鬱だ。

更衣室で着替え終わり、ほとんどの奴らは訓練用デバイスを借りに行っている。俺は自作のグローブ型のデバイスを持ってきたので問題ない。

「ところでイケメンさん、あなたのペアは?」

杖型のデバイスを持ったオカマが戻ってきた。どうやら奴はミッド式か……。

「近づくなオカマ……それと俺はヴェント、ヴェント・カグラだ」

「あら?ご丁寧にも、ジョニー・グラメルよ。それと私はオカマじゃなくて身体が男なだけよ」

いや、それがオカマだろうが。

「・・・で、ペアの話だっただけかジョニー」

「ええ、あなたペアはどうしたの？普通はルームメイトなのに」

そのことか・・・。。。

「どうやら俺のペアは女子らしい」

「あらそうなの、珍しいわね」

そうだな、訓練校のペアは連携が円滑に進むために同性同士で編成されるんだがな。今回は人数の関係で俺が女子とペアになったようだ。教官からは後で教えられることになっている。

「ああ、まあ正式なペアが決まるまでの仮ペアだ、気にはしないさ」

「そう、まあ頑張りなさい」

「ああ」

さて、どんな奴なんだろうな。

「おい、さっさと行こうぜヴェント！」

「騒ぐな馬鹿が」

まったく、騒がしい奴だ。てかそのスパイ型のデバイスを振り回

すな他の奴に迷惑だ。

「ムフフ、頑張りましょうねカカオちゃん」

「ち、近よんじゃね！」

「あん、いいじゃないのよ私たちペアじゃない」

「く、来るなーーーーー！」

「フフフ、お待ちになってえーーーー」

やっぱり騒がしいなああの二人。でもカカオの奴に同情するぜシヨ
ーと一緒になんて想像しただけでゾツとするぜ。

「さて、俺も行くか」

とりあえずまともな奴がペアであってくれよ。

「これより訓練を開始する！まずはラン&シフトだ、まずAチーム
から！」

訓練が始まった、でも俺は今別の問題に直面していた、それは・
・・・。

「始めまして、ギンガ・ナカジマです。よろしくお願いします」

青く長い髪の後ろにリボンのワンポイントの俺と同世代の少女、しかも性はナカジマ……間違いないあの時見た、クイントさんの娘だ。

「まさかこんなところで会うなんてな……」

「？　どうかしましたか？」

「いや、何でも無い。俺はヴェント・カグラだ。よろしく」

「はい」

手を差し出し握手する。どうやら俺のことは覚えていないようだな……。まあ、母親の葬式だったからな来た奴の顔なんて覚えてないか。

「ところでそのデバイスは自作ですか？」

「ん？ああ、そうだぞ」

「へえー凄いですね！」

「あ、ああ」

ホントにクイントさんの子だな、しっかりと人の目を見て話すとこなんてまんまクイントさんだ。

「どんな機能があるんですか？見たところカートリッジシステムが搭載されてい無いようですけど……」

「ああ、カートリッジシステムは着けてないな、あとはちょっと頑丈に……」

「あ、この部分は何ですか？何かの射出部分に見えるんですけど」

し、質問が止まん……！それに返答が済んでいない。

「あ、ここの材質もしかして……」

「次はCチーム、前へ！」

「お、俺たちの番だ、行くぞ！」

「あ、はい」

はあ……助かった。

「ラン&シフトだ、分かるかな？」

「はい、障害物を突破してフラッグ位置で陣形展開、ですよね」

「そうだ、そのローラーブーツ型のデバイスからして足は速いだろ
う？先行しろ、俺がフォローする」

「分かりました！」

さて、実力はいかほどに……。

「55……セット！……ゴォー！」

ドンッ！

開始の合図と共にナカジマはダッシュをかけた、用意されたコーンを安全確認しながら器用に曲がっていく。そして俺は彼女の後ろを追いかけ、そして危ういところをカバーしていく。

先にフラッグポイントに到着したナカジマは警戒態勢に入り俺を待つ、そこに俺も到着し陣形を展開する。

「よし55番、いいぞ！」

ふう・・・ナカジマもちゃんとできる奴みたいだな、これなら心配は無いか。

「お疲れ様です」

「ああ、お疲れさん。次は・・・」

「62・・・！！」

なんだ？

「危険行為！コンビネーション不良！腕立て二十回だ！！」

「な、何故だぁー！！！！？」

「あらん？私もしかしら？」

「連帯責任だ！」

・・・見なかったことにしよう。

「な、なんか変な人たちですね……」

「そうだな……ほら次行くぞ、順番だ」

「あ、はい」

次は垂直飛越、相方を押し上げて塀の上に飛び乗らせ、引っ張ってもらう奴だ。

「今度は私が下に行きます」

「ん？そうか、男の俺がやった方がいいんじゃないか？」

「私は足のがありますから」

足？ああ、そうかローラーブーツじゃ持ちにくいか。

「そう、だな……じゃあ任せる」

「はい！」

「55番」

塀の前に立ち俺はナカジマが組んだ手の上に足を乗せる。

「頼む」

「いきます！せーのっ！！」

って、うおっ!?

上に投げられ塀の頂上はすぐに見えたのだが力の入れすぎだ!

(チッ!)

塀を掴む事ができなかったなのでそのまま足を乗せてバランスをとりながら立つ。

「ふう……こっちだ」

「は、はい」

下のナカジマに手を伸ばすとジャンプして俺の手を掴んだ、俺はそれを引っ張り上げ一緒に下に降りた。

「55番……いいだろう。だが力を入れすぎだ、もっと抑えろ」

「りよ、了解しました……」

まあ成功したからいいかね。ナカジマは優秀だけどまだ力加減にムラがあるな、そこは直していかなきゃな。

「すみませんでした……」

「気にするな、成功はしたから十分だ」

「そう、ですか……」

ん、クイントさんみたいに活発なタイプじゃないからやりにくいな……。

「次、62番！」

お、今度はあいつらの番か。

「いっくぜえー！！！」

「ええ、突き上げて頂戴！ 激しく！」

「おりゃ――――！！！」

おいおい、あれは力入れすぎだろ。しかも魔方陣出てるし……
 ・てか、あいつベル力式だったのか。

「漢女は空を飛ぶうううううう――！！」

キラッ

1
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525

「馬鹿が……」

ジョニーは星になったとさ。

「そして、蘇る――――！！ぶるうあ！？」

帰ってきたよ、しかも地面に刺さってるし。

「し、死んじゃった……の？」

「漢女、フォーエバーエバー……!!」

「ヒッ！？」

ゾンビか奴は。てか漢女ってなんだよ？

「カカオちゃん、私を殺す気！」

「いや、そのすまん」

「いいわよん」

いいのかよ。

「62番……貴様らは走って来い！校舎百週!!」

「げえ!？」

「いゃん」

はぁ……前途多難だな。

「へ、変な人たちですね……本当に」

「そうだな……」

部屋割り……変えてもらえないかな、マジで。

決心はついた。だが……奴らとは関わりたくないな、マジで。

（後書き

少し話の展開速度が早すぎたか？でもまあいいか。

訓練校時代に突入しました、これからしばらくは訓練校編になる予定です。

オリキャラにオカマが登場しました、作者はオカマキャラが好きですので後悔はしていません！

では次回の更新で。

パンダか・・・何時までもつのやら。(前書き)

お久しぶりです、ISの方が落ち着いたので、ようやくこちらを上げれます。

それでは本編どうぞ。

パンダか……何時までもつのやら。

「でりゃあー!!」

「くっ!」

訓練校の訓練が終了した後、俺は自主練としてギンガと組み手をしていた。

「しっ!」

「キャッ!?!」

ローラーブーツでつけた加速の勢いをのせた蹴りを右拳で殴りはじき返した。ギンガはそのまま倒れ……俺はそこに……。

ビュッ! ビシッ!

「あうっ!?!」

顔に寸止めの拳を放ってから、デコピンをした。

「また俺の勝ちだな」

「ううゝ、ヴェント君のそれ卑怯だよ」

ギンガはデコを押さえながら恨めしそうに俺を睨む。

「いや、卑怯じゃないしな。魔導士同士の戦いじゃシールドやプロテクションの防御は当たり前だろ?」

「そうだけど……殴り返すのってやっぱり卑怯だよ！」

はぁ……我儚なお姫様だこと……。

訓練校入学から二ヶ月、俺はギンガと仮ではなく正式にペアを組むことになった。まあ、仮ペアからそのまま本ペアになるのが主流だが実際、こいつとは息を合わせやすいし気も利くので組んでよかったと思う。

それと、なんでナカジマって呼ばないのかというと本ペアになった時にギンガが。

『正式にペアになったんだから名前で呼んで』

と、言われたからだ。最初は断ったがこいつ地味に頑固だから名前で呼ぶまで何度も、しつこいくらいに何度も言ってくるので名前で呼ぶことにしたのだ。

「ほら、文句ばっか言ってるんで立てるか？」

「うん、ありがとう」

ギンガの手を取って立ち上がらせる。

「時間も遅いしそろそろ戻るか」

「うん、そうだね」

もう、すっかり日も暮れてまだ回りに何人かいたはずだが、それすらももういなくなってる……。

「どりゃあーーーー！！バーニングアターークッ！！」

「甘いわよん！漢女捕縛陣！！」
おとめほはくしん

「何の！！」

「……まだいたか。しかも馬鹿とジョニーのコンビだし。しかし、相変わらずの馬鹿魔力だな……。それも炎熱変換のレアスキル持ちだし。ジョニーのバインドを強引に引き裂いたぞ。ジョニーもジョニーだふざけた技名だけど、あのバインド頑丈で一回捕まったら中々抜け出せないんだよな。」

「相変わらず凄いねあの二人」

「ああ、今年の中じゃ一・二を争う実力者だからな」

「ただし馬鹿だがなと付け加える。それはギンガも苦笑いして否定はしなかった。」

「あの二人も正式なペアを組んだようだ、いや、正確に言えば組まれたというべきか。魔力保有量が多く、由緒正しいベルカ騎士の一族の力カオ。あんな馬鹿がベルカ騎士の末裔だなんて信じられんが……。」

「そしてオカマだが多種用なバインドで敵を捕縛しサポート、単身の戦闘能力も優秀なジョニー。」

「はつきり言って今期の中じゃこの二人は最強の部類なのだ。だが……。」

「個性が強すぎるんだよな、あいつ等……。」

「こいつら個性が強すぎて誰も組めないのだ。馬鹿すぎて誰も制御

できないーカカオ（馬鹿）、その強烈過ぎるオカマっぷりで誰も合
わせられないジョニー、はつきり言ってその才能が勿体無さ過ぎる。
結果、仮ペアの時点で組まされていたのをそのまま延長して正式
なペアとなったのだ。

「ぬおりゃー！ー！！」

「むっふー！ん！！」

本当に勿体無い奴らだよな、色々と…………。

「まったく、あの馬鹿魔力、少しでも分けてくれないかね…………
」

「あはは、大丈夫だよヴェント君強いから」

「そう、言ってもな……………」

俺、ヴェント・カグラの悩み、それは魔力保有量が一般管理局員
よりも少ないのだ。若干ではあるが一般局員は平均でBランクなの
だが俺はCランク、本来なら俺のような資質の低い奴は前線にすら
出されないのだ。

「大丈夫だよ、まだ成長期なんだし。それにアレ付けてるんでしょ
？」

「そうだが、あまり効果は無いしな……………」

「もう、簡単に上がったらみんな苦勞はしないよ」

「それもそうだな」

ギンガが言ったアレとは今、俺が付けているリストバンドだ。これは一見ただのリストバンドに見えるが実は特殊な素材でできていて、体に魔力負荷を与える物なのだ。前に魔力が少ないことを悩んでいた俺に母さんが作ってくれたのだ、筋力負荷は体に負担がかかるが魔力負荷なら体に負担がかからない、負荷と開放を何度も繰り返すことで魔力量が増えるのだ。

正直言つと、これのおかげでランクになれたのだが最近じゃあまり効果も無くなって来ている。そろそろ限界かね。

「あ、決まった」

「ん？おお、そうだな」

話し込んでいるうちにあいつらの模擬戦が終わったようだ、結果はジョニーの勝利で一カカオ（馬鹿）はなにやら如何わしい縛り方のバインドで拘束されている。無様だな。

「じゃあ、戻ろうか」

「おう」

さて、明日も早いことだしシャワー浴びて寝るか。ジョニーと一緒にシャワー浴びると色々と危険だから早く行こう。

「ぐふふ、さあ、カカオちゃん。私といいことしましょうね」

「だ、誰か助けてえーーーーー！？」

俺は何も見えてないし聞いていない。

「納得いかねえーーーーー!!」

「うつさい、黙れ」

ガスッ！

「ゲフッ!？」

ココアがうるさかったのでとりあえずボディーパーを打ち込んでおいた、わりと本気で。

「もう、ヴェント君。暴力はだめだよ」

「むう……」

魔法学校時代からの条件反射だからな、つい殴ってしまう。

「お、おお、さすがギンガちゃん……姿もそうだが心まで女神のようd……」

「ココア君もうるさいよ、もうちょっと周りの迷惑を考えなよ」

「・・・・・・・・・・チクシヨウ」

「あらん、どうしたの力カオちゃん？」

俺たちが騒いでいるとジヨニーがやってきた。

「あ、ジヨニー君」

「よう、ジヨニー」

「ハアイ、ギンガちゃん。で、力カオちゃんはどうしたの？」

今じゃ普通に挨拶しているが、最初のうちは怯えていたからなギンガの奴。まあオカマなのを除けば普通にいい奴なんだよなジヨニーって、やっぱり色々と勿体無い奴だよ。

「それが・・・・・・・・」

「なんで俺たちの順位があんなに低いんだよ！」

「今回の訓練成果発表が気に入らないんだとさ」

先ほどこれまでの成績の発表されたのだ、教官判断の正式なものではないが参考になるのだ。俺たちは総合五位、結構いい所にこれた。で、力カオたちの順位は。

「だって最下位だぞ！納得できるか！！」

最下位だ、まあそりゃそうだよなアレだけ訓練をかき回しておきながら上にいられると思うなよ。

「そうよね、でもしょうがないわ力才ちゃん、実際私たちまともに訓練できてないんだから」

「そんなの知るか！俺たちが一番強いんだぞ、なのに最下位なんて納得できねえよ！！」

こいつ等が一番強いそれは本当のことだ。この前のペア同士のチーム戦であいつらは全戦全勝、今回の成績順位のトップの奴らに全勝したのだ。それも圧倒的な、俺とギンガも負けた……悔しいことにな。

「でも、ただ強ければいいってものじゃないわ、管理局は組織なの。規律を守れなければ意味が無いわ」

「でも実際に強い奴が上に行ってるじゃねえか！なのに何で……」

「落ち着け馬鹿が」

ドスッ！

「グフウ」！？

ボディーをまた一発殴っておいた。

「な、何しやがるヴェント！」

「だから落ち着きやがれ。ジョニーに文句言っでどうする、成績を付けたのは教官だ文句があるなら言っで来い」

「おうっ！言ってきたやるぜ」

立ち上がり教官の元に向かっていった一カカオ（馬鹿）、これでよし。

「い、行っちゃったね……」

「あれでいいの、ヴェントちゃん？」

「いいんだよ、俺たちが言ってもあいつは理解しねえよ。だから直接、教える立場の教官に言ってもらったほうがいい」

教官の言うことはちゃんと聞くからなあいつは。

「それに、このことが理解できないなら力カオは管理局に必要は無い。どこか紛争が起きている次元世界で傭兵でもやっていたらいい」

己の力を誇示するだけなら管理局に入るなっただことだ。

「ヴェント君……」

「ヴェントちゃん、それは言いすぎよ」

「確かに言いすぎだな……。だが、あいつはスタンドプレイが過ぎている。もし同じ部隊に所属したとき俺はあいつに背中を預けられない。それはお前も同じなんじゃないかジョニー、ギンガ」

「……」

黙る二人。否定はしないのは心の中じゃ俺と同じ考えなんだろう。

「まあ、この話はここまでだ。これからはあいつ次第だ」

「そうよねん……カカオちゃんを信じるしかないわね」

「そうだね」

「あ、ところでヴェントちゃんにギンガちゃん、明後日からの休み何か予定ある？」

ん？休み？

「休みって何だ？」

「何だ、って……ヴェント君、明後日から訓練校のシステムチェックで三日間お休みになるんだよ、忘れたの？」

「ん？ああ、そうか明後日から休みだったか、すっかり忘れてたな」

訓練に必死で忘れてたぜ。

「もう、ヴェント君たら……で、ジョニー君どうしたのいきなり休みの予定なんて聞いてきて」

「そうだぞ、まさかストーカーするためじゃないよな……」

だったら言わねえぞ。

「そうじゃないわよ！お休みの日、一緒に買い物行かない？」

「「買い物？」」

ギンガと声をそろえて言ってしまった。

「そう、実は二人にお願いがあるのよ」

「お願いって何？」

「女性物の服を選べって言うならお断りだぞ」

ジョニーと一緒に女物の服屋に入った日には俺も変態の烙印を押されるだろう。

「違うわよ、実はデバイスの部品を見に行つてほしいのよ」

「デバイスの部品？何でだ」

「実は私の魔法、訓練用のデバイスじゃ処理し切れなくてオーバーロードしちゃうのよ。だから教官に自作のデバイスが市販されているものを買えって言われてね……。でも市販されている奴だとどうしても高くなるから……」

「だから私たちに？」

「そうなのよ！私、デバイスの部品のことなんて全然分らないし・
・だから自作デバイス持ちのあなた達に教えてほしいのよ」

ふむ、そういうことか……。確かに訓練中何度かジョニーのデバイスの調子が悪そうだったからな……。原因は処理し切れ

なかったのか。まあ訓練用だからな、ジョニーのような一点特化型の魔法じゃそうなるか。

こいつには色々世話になってるし……。

「いいぞ、俺でよければ教えてやるよ」

「私も。でもそこまで期待しないでね」

「ホント！ありがとう二人とも！それじゃあ何時にする？私はいつでもいいわよん」

「ん」と、私一回家に帰りたいしな……スバルの様子も見に行かないと。それじゃあ、二日目なんてどう？ヴェント君は？」

「ん、そうだな……」

俺も家に帰りたいしな、母さんにも会わないと……それだったら二日目がちょうどいいか。

「俺もそれでいいぞ」

「じゃあ、決定ねん！よろしく頼むわよん！」

「ああ」

「うん」

さて、じゃあ店調べておかないとな……ってあれは。

「……………」

「よう、どうだった馬鹿」

「ぷっ……だ、大丈夫、か、カカオ君……」

「あらん、イケメンなのに勿体無い。でも可愛くなっただねん……じゅるり」

教官に文句を言っただけ帰ってきたカカオの顔は見るも無残な両目に青タンをつけた……。第97管理外世界の人気動物、パンダになっていた。

「……笑いたければ笑え」

「じゃあ、大笑いしてやろうか？」

「生意気言っですみません！だから笑わないで！」

自業自得だ馬鹿が。ちなみにギンガは隅で必死に笑いを堪えていた。

「あつ、遊びに行くなら俺も行くぜ！」

聞いてたのかよコイツ。どんだけの地獄耳だよ。

ちなみに翌日、パンダのまま訓練に出たカカオ（馬鹿）は全員に笑われるという大恥を掻いたのだった。

パンダか・・・何時までもつのやら。（後書き）

パンダ、見に行ったのですけど人並みに揉まれて全く見れませんでした・・・チクショウ！

次回は買い物編？です。それでは次回の更新で

掘り出し物とは一期一会なのだよ、分かるかね？（前書き）

書きあげましたので投稿します、今回は原作でもお馴染みのあの子を登場させました。

では本編どうぞ！

掘り出し物とは一期一会なのだよ、分かるかね？

「遅いな．．．．時間間違えたか？」

休日の二日目、俺は事前に決めていた待ち合わせ場所の駅前で待ちぼうけしていた。

「間違つてないよな．．．．全員遅刻か」

「あら、早いわねんヴェントちゃん」

「遅いじゃねえかジョニー、遅刻だぞ」

待ち合わせ時間から二十分でようやく一人やってきた。

「え？何言ってるのよ、待ち合わせの時間変更になったじゃないの」

「は？そんなの知らんぞ」

聞いてもいなし。どういうことだ？

「あら？おかしいわね、カカオちゃんが連絡するってことになってたはずんだけど．．．．」

ああ、あいつのせいか．．．．！

「やつほー！俺様参じ．．．．」

走ってきた奴に俺は思いっきりラリアットを喰らわせた。もちろ

ん手加減なしだ。

「ゲフツ!?! な、何をする……ヴェント」

「何じゃねえよ馬鹿が、貴様、俺に時間変更の連絡はどうした」

「……………あ」

忘れてやがったなコイツ。

「あ、あはは、ドンマイ!」

ドスドス!

「目があ—————!?!」

知るか……………。

「後はギンガちゃんだけね」

「そうだな」

「目が……見えん……どこだヴェント」

無視だ無視、しばらくそのままでいろ。

「あ、来たようねん」

「そつみだいだな……って、ん?」

駅ホームから見慣れたりボンの女の子が見えた、ギンガだ。だがその隣には……。

「誰かしら、あの子？」

「……妹じゃないか」

ショートカットの小さな女の子、あれはクイントさんのもう一人の娘、葬式の時に見た泣いていたあの子だ。
でも何でいるんだ……。

「ごめんなさい、遅れちゃった？」

「いいや、大丈夫だ」

「ええ、時間ピッタリよ。それに女の子は準備に時間がかかるからね」

「そう、よかった……あれ？カカオ君は何をしてるの？」

「さあな、目が退化したんじゃないか。それよりもその子は……。
・？」

俺たちが目線を下に向けると、女の子はギンガの後ろに隠れてしまった。ジョニーが怖いのか？

「あ、うん私の妹で、どうしても着いてくって……ほら、スバル。挨拶しなさい」

「う、うん……」

ギンガが背中を押して前に出させた。この子もクイントさんに似ているな…………。

「す、スバル・ナカジマです。よろしく願いします…………」

うん、ちゃんと挨拶もできるみたいだな。

「はい初めまして、私はジョニー・クラウンよ。ジョニーって呼んで頂戴、スバルちゃん」

ジョニーは目線をスバルちゃんに合わせるのだが元が不気味なせいかまたギンガの後ろに引っ込んでしまった。

「こ、こら、スバル！失礼でしょう」

「うっ……」

あらら、完全に怯えちゃってるよこの子。どうするジョニー。てか、ジョニーの姓ってクラウンだったのか初めて知ったな。

「あらあら、驚かしちゃったわね…………とりあえずコレどうぞ」

「あ、アメだ！」

ジョニーはポケットの中からアメ玉を取り出してスバルちゃんにあげた。アメに釣られてスバルちゃんもギンガの後ろから出てきてアメを受け取った。餌付けだなコレ。

しかしスバルちゃんもスバルちゃんだ、お菓子が好きなのかし

れないけど怪しい奴にお菓子をもらって心を許しちゃだめだろう。

「はい、よろしくね」

「うん」

まあ、ジョニーだから大丈夫か。次は俺か……。

「初めましてスバルちゃん。俺はヴェント・カグラ、よろしくな」

ジョニーがやったように目線を合わせて手を前に差し出す。でも、スバルちゃんは……。

「じーーーーー」

「な、何かな？」

「じーーーーー」

もしかしてこの子、俺のこと覚えているのか？

「あ、ギン姉と一緒に写ってた人だ！」

「ん？」

「ちょ、す、スバル！」

写ってた？どういうことだ？

「あらん、どういうことスバルちゃん？」

「えっとね、前、ギン姉からのメールの写真にね、一緒に写ったの」

「へえ、そうなの」

写真って・・・ああ、確か正式にペアを組んだ時に撮ったけな。ギンガの奴あれ送ったのかよ。でも、ジョニーなんでお前ニやついてるんだよ、はっきり言って気持ち悪いぞ。

「べ、別に深い意味は無いからね！た、ただの連絡の為に・・・」

「ふうん・・・まあ、そういうことにしてあげましょうか」

「じよ、ジョニー君！」

「？」

何の話をしているんだこいつらは・・・。

「そ、それよりも早く行きましょう！時間は有限なんだから」

「ん？そうだな」

「そうよねん、行きましょうか」

「ああ、じゃあまず俺のデバイスの部品を買ったショップに行くか。ここから近いしな」

「じゃあ、そうしましょ。お願いねヴェントちゃん」

「ああ」

あそこだったらいい掘り出し物がありそうだしな。ジョニーに合う部品も見つかるだろ。

「こつちだ」

「ええ、さあ行くわよスバル」

「うん！」

「さあ、気合入れていくわよゴルア！」

ジョニー、いきなり野太い声に変えるなよな…………。

「ま、待ってくれ皆…………目が、目が見えないんだ」

あ、馬鹿のことすっかり忘れてた。

「む……………」

「すまん、あんたが言った部品は今は扱ってないな」

「そうですか」

「ここにも無いか……。」

「ココも駄目みたいね……。」

「ああ、もう製造してないのかしら……。」

そんなこと無いはずなだけだな……。……。ジョニーのデバイスの部品を求めているんな店に入っただが最後の一つがどうしても見つからない。

「まだなのかよ、もう飽きちまったぜ」

「たくつ……。」

「カカオ君そんなこと言わないの、今日はジョニー君の為に着たんだから」

「でもよ、コレだけ店を回ったのに見つからないならもう無いんじゃないかねえのか？」

「……その可能性もあるな……。型は古くマイナーなパーツだから、市場に出回ってないのかもしれないな。」

「そうよね……。ねえヴェントちゃん、代用できるパーツは無いの？」

「あるにはあるが……。高いぞ」

「どの位？」

「・・・・・・・・・・ぐらいだ」

ジョニーの耳元で小声で言うとジョニーは固まってしまった。

「マジで・・・・・・・・」

「マジだ」

代用できるパーツの値段はハッキリといえば安いデバイスなら簡単に買える値段だ。そのくらいの高級パーツなのだ。

「それは無理ね・・・・・・・・」

「だろ」

俺たちはまだ正式な局員じゃないから給料は少ないからな、なるべく少ない出費でやらないといけない。

「そ、そんなに凄い値段なの？」

「新品のデバイスを買ったほうがマシって値段だ」

「うわぁ・・・・・・・・」

後一つなだけだな・・・・・・・・。

「ギン姉、お腹空いたよ」

「え？あ、もうこんな時間・・・・・・・・」

「そうだな、いったん中止して飯にするか、それでいいかジョニー？」

俺も腹減ってきたしちょうどいいか。

「いいわよん、私もお腹ぺこぺこ」

「俺もだ！」

お前には聞いていないわカカオ（馬鹿）。

「じゃあ行くか」

さて、バイキングの店を探すか。じゃなきゃこの姉妹は……………。

「おかわり！」

「わ、私も……………」

「……は、はは……………」

ど、どんだけ食うんだこの姉妹は……………。訓練校でギンガとよく行動することになってから分かったことなのだがコイツは、いやこいつの家系はとにかく食うんだ。それもおかしい位に。

「ヴえ、ヴェントちゃん、会計大丈夫？」

「大丈夫だ、そのためにバイキングの店を探したんだ問題ない」

「ギンガちゃんは知ってたけど、スバルちゃんまで食うとは思わなかったぜ」

料理を取りに行った二人に聞こえないように小声で話す。男三人。

「でも、さすがにヤバくないかしら、店員さんの目が怖いんだけど」

「気にするな、それに限界まできたら店員が止めに来るだろう」

「でも、なんであんなに食えるんだ？俺もよく食べるほうだけどあそこまでは食えねえぞ……」

知るか、ナカジマ家の胃袋には虚数空間でもあるんじゃないか。

「ただいまー！」

「ただいま。三人とももういいの？食べ足りてないんじゃないの？」

「「「気にしなくていい（わよ）」」」

「？　そう」

そういい皿に高く盛られた料理を食べ始めるギンガ、見てるだけで腹いっぱいになるつーの。スバルちゃんとギンガの皿の料理はみるみるうちに減っていき……。

「ふう、」馳走様！」

「私も」

ようやく終わったか……後ろにいた店員も安堵の息を吐いているな。

「じゃあ、デザート！」

「そうねスバル、アイスがあつたから行きましょう」

「「「え？」「」「」

まだいけるのか！？思わず声が合つちまつたじゃねえか、店員も。

「わーい、アイスだあー」

こいつらは化け物か…………。

「俺、初めてだぞ。バイキングの店で帰ってくださいって言われたの」

「だ、だからもう言わないでよ！恥ずかしいんだから…………」

「それはこっちの台詞だ」

あの後すぐに俺たちの席に店長が従業員数人を引き連れて頭を下げられた。このままじゃ店が潰れるから帰ってくれと言われてな。おかげで食っていない俺たちも公衆面前の前で大恥を掻く羽目になった。

「そ、それは謝るけど………」

「はぁ……まあこれでお前はあの店のブラックリストに載ったわけだ、もう行けないな」

「う、うそっ！？そんな～あのお店の料理美味しかったからまた来ようと思ってたのに………」

「諦めろ、あつちも商売なんだ。お前とスバルちゃんがしょっちゅう来たらすぐに閉店に追い込まれるぞ」

店長自らが頭を下げたんだからな、相当凄かったんだろう、金額的に。

「まあ、次から気をつけて………」

「はぁ～これで三件目か」

「何度もやってるのかよ！」

常習犯かコイツは、てか学習しろよ！

「だって食べ放題って書いてあるから………」

「それにしても限度つてものがあるだろう・・・たく」

こいつそのうち街全体の店のブラックリストに載るんじゃないのか心配になってきたぜ。

「あら、ねえヴェントちゃん。あそこのお店つてデバイスのお店じゃないの？」

「なんだつて」

大通りから外れた小道の奥のほうに小さな看板が見えた、そこにはちゃんとデバイスのシヨップと書かれていた。

「本当だな、こんなところにあつたなんて知らなかったぜ」

「でも、あんなボロイところにねえんじゃねえのか？」

「まあ行ってみましようよ、もしかしたらあるかもしれないし」

「そつだな、行ってみるか」

案外掘り出し物があるかもしれないしな。騙されたと思っていつてみるか。

〽三分後〽

「毎度あり」

「まさか本当にあるとは思わなかった」

「私も……………」

「あるところにはあるのね」

「しかもまだ大量にあったぞ……………」

「いっぱい」

「コレまで行った店はなんだったんだ……………しかもあの店かなり安かったぞ。今まで買ってきたパーツもあったし。隠れた名店ってこういうところのなんだろうな。」

「でも、これで全部揃ったな」

「よかったわねジョニー君」

「ええ、コレで私専用のデバイスが作れるわん！」

「時間も余ったな、どうする？」

「俺はこのまま解散でもいいがこいつらはどうせ……………」

「じゃあ、このまま遊びに行きましょう！」

「賛成だ！」

「さんせー！」

遊びにか・・・まあそれもいいか。

「ギンガは？」

「私も賛成、洋服とかも見たいし」

「そうか、じゃあ、どこから行く・・・っ!？」

景色が変わった・・・色は灰色になり、賑わっていた大通りも人数が一気に減った・・・これはまさか・・・。

「こ、これって広域結界!？」

「な、なんでこんなものが突然・・・？」

「どうなってるんだよ・・・」

突然の結界に戸惑う俺たち、こんな街中で結界が展開されるなんて異常なことだぞ、あったとしても事前に管理局が退避させる。だとしたら考えられることは・・・!!

「お前等、この先にあるデバイスショップに急ぐぞ・・・」

「え？何で・・・」

「俺の予想が正しければこれからやばいことが起きるってことだ・・・」

「管理局がやらなかったら誰がやった？他に考えられることは・・・」

「事件が起きるぞ……！」

ドooooooooンッ!!!

遠くで爆発が起きた。そこからは茶色の光、魔力光が見える。火が上がる建物、人の呻き声も聞こえてくる。

これで確実だ……この結界は犯罪者が起こしたものだ。

「げへへ……皆殺しだoooooooo!!!」

立ち上がる火を掻き分け出てきた中年の男、目の焦点は合ってなく口からは涎が垂れている。男はその目をこちらに向けて叫んだのだった。

そして俺たちの休日 は地獄へと変貌したのだった。

掘り出し物とは一期一会なのだよ、分かるかね？（後書き）

急展開にしすぎたかなと少し後悔中。

今回の話ではSttSのもう一人の主人公？のスバルを登場させました、これで原作突入時に話を書きやすk・・・ゲフンゲフン、なんでもないです。

次回はこの小説初となるちゃんとしたバトルシーンとなります。ちゃんと書けるか心配ですが、頑張ります！

では次回の更新で

男にはやらなければいけないときがあるのだよ。(前書き)

今回も○○○○です・・・・すみません。
本編をどうぞ。

男にはやらなければいけないときがあるのだよ。

「ヒヤハハハ！皆殺しだーーーーー！！！」

男はまた魔方阵を展開して今度はビルに向けて砲撃を放った、するとビルは簡単に破壊され崩れ落ちたのだった。

「来ちまったか……ギンガ、局に連絡だ！」

「そ、それが通じないの、通信が妨害されていて……」

通信妨害も兼ねてるのかよこの結界は！

「とりあえず市民の安全の確保だ！ジョニー、カカオ手伝え！」

「え、ええ……！」

「お、おう！」

「ヴェント君、私は」

「お前は避難誘導だ！近くに避難用のシェルターがあるはずだそこに行け。それとスバルちゃんをしっかりと守っておけ」

「う、うん！」

ここはまだあいつからの死角だ今のうちに市民を避難させないと……！幸いあの犯罪者は正気を保っていないのか何も無いところに向かって叫び続けているし見えていない。早く避難させないと。

「た、助けっ・・・!？」

「落ち着いてください、自分たちは管理局の者です」

「か、管理局の・・・。」

「今から安全な場所まで誘導します、だから落ち着いて行動してください」

「あ、ああ」

よしっ、いったんは落ち着いたか・・・。

「では、あの女の子に着いていつてください、安全な場所まで誘導してくれます」

「わ、分かった」

男性は立ち上がりおぼつかない足取りでギンガの方へと向かっていった。ジョニーとカカオも順調だな・・・あいつがこちらに気づかないうちに何とかしないと・・・。

「あの子が避難用シェルターに案内してくれます」

「は、はい」

座り込んでしまった女性を立ち上げらせギンガの方に向かうのを

見送る。これで、最後か……。人数が少なくてよかった。で、あいつは……。

「ゲヒヤヒヤヒヤ!」

ドオンッ!

っ!?……。見つかっちまったか。

「みいゝつけた!」

くっ!?

「ヴェント君!」

「ギンガは早く行け!市民の安全が一番だ!!」

「で、でも……」

早く行け!

「っ!……。分かった、気をつけてね!」

「おう」

……。行ったか。

「ぐひゃ、ぐひゃひやはは!」

コイツ、薬物でも服用してるのか、精神状態が異様に不安定だ……。

「ひやはあっくくくく!!」

ドオンッ!!

「アヒヤヒヤッ! 粉微塵だあゝ・・・あっ?」

「危なかった・・・」

あの男が撃った砲撃を何とか避けて瓦礫の影に隠れた俺たち、奴は俺の死体が見たら無いのに気づいて辺りを探している。

「で、カッコつけたのはいいけど、どうするのヴェントちゃん、私たちも避難する?」

「無理だろうな。今避難したらこいつは避難所に行く可能性が高い・・・」

先ほどのビルを破壊した砲撃からして避難所のシェルターなんて簡単に潰せてしまうはずだ。

「だ、だったらどうすんだよ・・・?」

この結界に気づいて近くの部隊がもう動いているはずだ、だからそれまで・・・。

「俺たちが奴を食い止める」

「む、無茶よ! あなたもさっきの砲撃を見たでしょ!」

「そ、そうだぜあれはどうみてもAランク以上だ！そんなの俺たちが食い止めるなんて無理だ！」

確かに、あの砲撃はAランク以上の威力だったが。

「だがここで下がれば市民に危険が及ぶ」

「で、でも……」

「それにすぐに近くの部隊から武装隊が来るはずだ、俺たちはそれまでにあいつの注意を引き付ければいいだけだ」

局の部隊が来ればあの男を倒せることができるはずだ。

「簡単に言ってくれるわね……」

「ああ、そうだな……でも今できるのは俺たちだけだ」

「……」

「別にお前たちは避難してもいいぞ、だが俺はやる」

このままあいつを野放しにしたら被害が出る、そしたら悲しむ人が多く出るだろう、俺は悲しむ人たちを出さないために管理局に入ったんだ、だからこんなところで逃げてたまるか！

「しょうがないわね……付き合ってあげるわ」

「俺も付き合っぜ！ここは最強の俺様がいたほうがいいだろ」

「ジョニー、カカオ・・・・・・・・いいんだな」

こいつらも覚悟したか・・・・・・・・だがもう一度聞いておく。コレは死ぬかもしれないからな。

「ええ（ああ）」

「サンキュ・・・・・・・・」

助かるぜ、正直言う足が震えてるんだよな・・・・・・・・でもこいつらがいたら大丈夫だ。

「じゃあまずは、後ろのほうにデバイスショップからデバイスを取って来い・・・・・・・・デバイスが無ければ戦えないだろう」

「そうね・・・・・・・・でも取ってこれる暇なんて・・・・・・・・」

デバイスショップまでの道程は確実にあいつの視界に入ってしまった。だから・・・・・・・・。

「俺が奴の気を引いてる間に取りに行つて来い」

「な、何言ってるの！？危ないわよ！」

「そつだぞ！それにお前だってデバイスねえじゃん・・・・・・・・」

「俺のはここにある」

懐から金属製のカードを取り出し見せる。

「それって……」

「持ち運びが面倒だったんでな、携帯できるようにしたんだよ。まさかこんなところで役立つとはな」

「で、でもお前一人でなんて……」

「コレしか手が無いんだ、やるしかないだろ。それにお前等が早く戻ってくればいいことだ」

「……」

「どこだぁー……！！！！」

ドンッドンッ！

チッ、瓦礫を吹き飛ばし始めたか。

「時間も無い、行くぞ」

「分かったわ……行くわよカカオちゃん」

「ああ！ヴェント俺たちが来るまでくたばんじゃねえぞ」

「おう」

目を閉じて深呼吸をし気持ちを落ち着ける。……よしっ！

「Set……」

カードが光り俺の手を包み込んだ。光が納まると俺のデバイスが両腕に装備した状態になった。

「そこかあ~~~~~!!!」

光に気づいた奴は、魔力を収束し始めた。

「いけえっ!!」

俺の合図とともに二人は瓦礫から出て駆け出した！

「死ねえーーーー!!」

奴のデバイスは二人へと向けられた。させねえよ!!

《Assault Step（アサルト・ステップ）》

デバイスから電子音声が響くと俺の足が魔力によって強化させた。そして地面を蹴り奴に突っ込んだ!!

「ひゃ？」

「喰らいやがれ!!」

《Hard Beat（ハード・ビート）》

「グヒャッア!？」

魔法で拳を強化して俺は奴の顔を思いっきり殴った。急接近した俺に気づかなかった奴は俺の拳をモロに受けて吹き飛んだ。収束し

ていた魔力は霧散し砲撃の心配は無くなった。

これで倒したとは思えない……。警戒は解いてはいけない。

「貴様ぁーーーーー!!!!」

やっぱりか……。

「殺すクロスころす殺すころす殺すクロス!!!!」

奴は怒り狂いデバイスを振り回す、周りには茶色の魔力スフィアが形成されていく数は約三十……。威力は未知数だ。どうする！

「アーーーーー!!!!」

奴の奇声が合図となり三十発のスフィアが一斉に放たれた。

「くっ!?!」

防ぐのは無理だ、だったら……!

《Shell Gauntlets (シェル・ガントレット)》

「はぁーーーーー!!!!」

弾くのみ!!

俺の前腕は魔力を纏い、その腕で迫り来るスフィアを弾き飛ばした。

「あ?」

「おおーーーーー！！！」

スフィアを殴り、時には難いで攻撃を弾き飛ばす。だが……。

「死ねシネしね死ね死ね死ねえ！！！」

奴はドンドンとスフィアを生成して撃ち放ってくる数も多くなつていく。それが段々と捌ききれなくなり遂に……。

「ぐっ！？」

防ぎきれなくなつて一発体に当たってしまった、体に痛みが走るがそのまま防ぐ。体に裂傷は無い……。幸い、奴のデバイスは非殺傷設定みたいだな。

「ヒヤハハハハハハハッーーーーー！！！」

まだあれだけのスフィアを出せるのか、魔力量どんだけあるんだよ……。でもこのままじゃいずれは防ぎきれなくなつてやられる……。ジヨニーと力カオはまだなのか！

「ヒヤハッ！死ね！！！」

や、ヤバッ！？砲撃が……！！

「又オリヤアーーーーー！ストラグル・バインド！！！」

野太い声とともに奴がバインドで縛られた、そして……。

「どつせい!!」

炎を纏わせた大剣が奴を吹き飛ばした。ようやく来たか……。

「遅いぞ二人とも……てつきり逃げたのかと思ったぞ」

「へっ、俺様がそんなことするわけ無いだろう!」

「笑えない冗談ね、ヴェントちゃん。私のことそんな女だと思つたの? 心外だわん」

俺の前に立つジョニーとカカオ、二人の手にはデバイスショップから拝借してきただろうデバイスが握られていた。

ジョニーには大きな杖方のストレージデバイス、カカオは両刃の大剣型のアームドデバイスが握られている。

「随分といいのを借りてきたな」

「ええ、一番高そうなのを借りてきたわ。作るならこんなのがいいわねん」

「へ、あそこのショップの奥に隠してあつたのを借りてきたぜ、これはまさに俺様のためにあるようなデバイスだぜ!」

確かに二人の戦闘スタイルに合ってるかもな。でもこれでだいぶ楽になる。

「それよりもやったのか?」

「さあ、でもいいのが入ったから、もしかしたら・・・っ！散開！
」

ジョニーの怒号に反応しその場から飛び退くと茶色の閃光が通り過ぎた・・・やっぱりまだダメか。

「貴様らあああああああ！！！！」

今度こそマジでキレたっばいな・・・。

「気、引き締めるよ」

「わかってるわ」

「おう！」

武装隊が来るまでなんとか持ちこたえる！

「行くぞっ！！」

「「おお！！！！」

ドオンッ！！

「くっ！？・・・ジョニー！」

「おうつ！チェーンバインド！！」

「ガアア！！」

ジョニーのバインドで押さえている間に次の手だ！！

「カカオ！！」

「おうよ！どりゃあ！！」

「ガアッ！！」

ギンツ！！

カカオのデバイスと奴のシールドがぶつかり合い火花を散らす。

「でりゃーーーー！！」

「ぐおおおおお！！」

「く、うわっ！？」

攻撃はシールドを破れず弾かれ、奴はバインドを引きちぎりカカオをデバイスで殴り飛ばした。

「せいっ！！」

殴り飛ばされたカカオと入れ替わり俺が奴に殴りかかるがまたもシールドに攻撃を弾かれ後退した。

「ハアハア．．．．．バインドが全然効かないわね」

「それよりも攻撃が全然通らない．．．．．」

「堅すぎるぜアイツ．．．．．！」

先ほどから三人での連携で戦っているのだが奴に攻撃が全く通らない。前に当てたのは完全な不意打ちだったから通ったが警戒されて防御が厳重になりやがった。

俺たちの中で最も攻撃力がある力カオの一撃でさえ防がれる始末だ。

「ゼエゼエ．．．．．武装隊は、まだなのかよ！」

「時間．．．．．どれだけ経ったの．．．．．？」

「ハアハア．．．．．二十分だそろそろ来てもいい頃なんだがな」

結界がかなり頑丈なのか？それとも武装隊がまだ動いてない．．．．とは考えたくは無いが、このままじゃ俺たちの体力もヤバイ。

「ゲヒヒ、ゲヒヤハハハ．．．．．！」

だがそれは奴もだ、あれだけ魔力を使っただけなのに魔力が多かるうともそろそろ尽きてもいいはずなんだが。

「ヒヤハアツ！！」

「っ！？散開！」

ドンッ！

なんで一向に尽きる気配が無いんだよ！

「ジョニー！もう一回だ！！」

「オラアッ！！」

「アアアアアーーーー！！！！」

ジョニーのバインドで何度も縛られ奴は怒り狂う。

「カカオッ！！」

「おうつ！！」

今度は同時だ、喰らいやがれっ！！

《Hard Beat》

「でえりやあつ！！」

ガンッ！！ギンッ！！

「ガアアアアア！！」

やっぱり堅いな……でもこのまま押し切る！！

「もう一発っ！！」

《Hard Beats!!》

左の拳にも魔力を込めて両腕で何度も殴るとシールドにヒビが入った。これを逃がすわけにはいかない！渾身の力を右手に込めて振り切った。

「おらあっ！！」

「グベエ！？」

シールドは破れ、俺の拳は奴の顔へと吸い込まれた。

「どっ……せいっ！！！」

「ガァーーーーー！！？」

ドオンッ！

さらに追撃としてカカオの一閃が奴の腹を捕らえ吹き飛ばした。そして瓦礫が落ちてきて奴は埋もれた、立ち上がる様子も無く静寂だけが過ぎていく……。

「ハアハア………」

「ゼエゼエ………」

もう限界だ、先ほどの攻撃で魔力と体力を殆ど使い果たした。これ以上は無理だ……。

「……や、やったの？」

「わからん……だが、今は決まった、はずだ……」

「俺様の全力だ……立てるわけが^{トコ}ン……嘘だろ」

マジかよ……まだ立てんのかよあいつは……。

「ゲフツ……ガフツ……!」

と、吐血……!どこか身体を壊したのか。

「これ以上は止める!死ぬぞ!!」

「ガアアア!!」

ドオンツ!!

「くっ!?!」

聞く耳なしかよ!奴は問答無用に砲撃とスフィアを放った。

「グルアアア!!!!」

奴は雄たけびを上げた後、無差別に砲撃を放ち始めた。避けた際にスフィアが顔を掠った場所から血が流れる。あいつ、遂に非殺傷設定を切りやがった!

「完全に正気を無くしたようね」

「でも奴は手負いだ!俺が決めてやる!!」

デバイスを構え直したカカオが奴へと走り出してしまった。

「カカオ、一人で突っ走るな!!」

「カカオちゃんダメよ!」

「おおおおお!!」

カカオは俺たちの言葉も聞かず突っ込んでいく。すると俺の視界に小さな魔方阵が見えた、あれは・・・まさか!?

「やめろカカオ! 罠だ」

「なっ!?!」

カカオの足をバインドが縛り動きが止まってしまった。設置型のバインド、あいつそんなことができるほどの理性があったのかよ!?

「ゲヒッ!」

収束砲、ヤバイ!

「逃げるカカオ!」

「だ、ダメだ、バインドが解けねえ!!」

くそっ、カカオの処理能力じゃ間に合わない、だったら奴を・・・!

「ジョニー!」

「邪魔するなあああー!!」

「ぐっ!？」

「きゃあん!？」

ダメだ、弾幕が濃くて奴に近づけない。殺傷設定であの威力の砲撃を受けたら力カオが……!

「ヒヤハッ!ヒヤハハハハ!」

「させるかあゴルア!!」

「じよ、ジョニー!？」

ジョニーは力カオの前に立ちバリアを何重にも張る。まさか防ぐつもりか!？

「止めるジョニー!!」

「死ね死ねシネ死ねええええええええええ!!」

放たれた砲撃、その太い閃光はジョニーの張ったシールドとぶつかるが……。

バリンッ!

その威力に耐えられず直ぐにバリアは破られる、一枚から二枚、三枚と徐々に残りの枚数は少なくていく、そして最後の一枚が……。

バリンッ!!

破られた。そして閃光が二人を飲み込んだのだった。

男にはやらなければいけないときがあるのだよ。（後書き）

書いていていつも思うことは文才が欲しい……です。

今回初戦闘シーンなのですが全然上手くないですよ、すみません。

次回の更新は少し遅くなると思います。では

無茶と無謀は違うつてのを理解したよ、この身で……。（前書き）

だいが難産でした……どう書けばいいのか悩み、何度も書き直しました……。

とりあえず本編をどうぞ。

無茶と無謀は違うつてのを理解したよ、この身で……。

「ヒヤハハハハハハ！死んだ！二人死んだ、ヒヤハハハハハハ！
」

閃光が過ぎ去った後の場には何も残っておらず、焼け跡だけとなっていた。あの二人の姿もない…………。

「き、貴様——！！」

何笑ってやがるんだクソ野郎が！！
俺は残り少ない魔力を拳に込め、やつに殴り掛かったが。
ギインッ！

「くっ……………！」

奴の頑強なシールドに阻まれ攻撃は通らなかった…………だが
奴も。

「ゲホオ…………ギャハ、ハッ…………カフッ！」

口から血を吐き出しながらも笑っている。でもそんなことは頭の中に入らない、俺の思考は奴への怒りでいっぱいだった。

「おおおおお————！！」

『ヴえ、ヴェント……………』

っ！？今の念話まさか、カカオか！

『カカオ生きているのか！』

『あ、ああ……ジヨニーも生きてる。今そこから離れたビルの裏だ』

よかった……本当によかった……。でもどうやってあの砲撃を……。

『ジヨニーが砲撃を防いでくれているうちに何とかバインドが解けたんだ、その間に……』

そうか、だから無事だったのか……。

『とりあえずよかった……。怪我は、身体は無事なのか』

『俺は大丈夫だけど、ジヨニーがちょっとヤバイ、頭を打って血流してんだ……。意識もない』

っ！早く医者に見せないとヤバイな……。打ち所しだいでは死んでしまつかもしれない……。

『……。カカオ、お前はジヨニーを連れてシエルターに行け。幸い奴はまだお前たちが生きていることに気づいていない。今なら行けるはずだ』

ジヨニーはとりあえず安静にしなければいけない……。応急処置もだ、でもこんな不衛生で危険なでは場所では無理だ、シエルターに行かせるしかない。

『でも……お前一人でどうするつもりなんだよ!』

『やるしかないだろ、それにお前、怪我隠してるだろ』

『ぐ……』

やっぱりか、なんか痛みを耐えている感じがしたから言ってみたんだが本当だったな。

『で、でもお前だって魔力が……』

『ああ、だが満足に動けるのは俺だけだ、何回避に専念すれば時間は稼げる。だから早く行け』

奴の攻撃は単調になっている、できないことはない。

『……わかった、死ぬなよヴェント』

『ああ』

……さて、とりあえずあいつらがシエルターに着くまでバレねえようにしなくちゃ。このままだと流れ弾に当たりそうだし。

「ゲヒッ……」

「さあ、こつちだクソ野郎殺せるもんならやってみな!」

「ガァァァァァ!」

よし、かかった。しかしこうなるとただの獣だな。まあ、こっちはその方がやりやすいんだがな。

「さあ、鬼ごっこだ……ついて来いよ!」

＼side ???＼

『航空魔導師、本局01現在位置を教えてください』

「こちら本局01、目的地まであと約十分の距離です」

『急いでください、現在地上部隊が結界の破壊を試みっていますができそうにもありません』

「了解!……急ぐよ」

『Yes, sir』

急がないと………!

＼side vent＼

「ハアハア……ッ!」

すぐ近くの瓦礫にスフィアが直撃し粉々になる。だが足を止める

な、止めた瞬間死ぬぞ！そう自分に言い聞かせて身体を強引に動きます。

「ガアアアア！！」

（ちゃんとしてきてるな．．．．．いいぞ、そのままついて来い！）

「ガアアアアツ！！！」

「おっと！！」

あぶねえ．．．．．コイツ段々と攻撃の精度が上がってきてやる、いや．．．俺が遅くなってるのか。

あいつらは大丈夫なのか．．．そろそろシエルターに着いていていいはずなんだが．．．。

『ヴェント、生きてるか！』

きたか．．．。

『ああ、生きてるぞ』

『よかった、無事か．．．．．』

『そこまで大丈夫でもないがな』

うわ、あぶねっ！俺はマルチタスクを駆使しながら回避と念話の両方を同時にやる。

『で、ジョニーの容態はどうだ？』

頭部を打ったんだ、何も無ければいいんだが……。

『あ、ああ避難所に医者がいたから診てもらったけど、命に別状は無いみたいだ』

そうか、よかった……。

『お前はどうかんだ……』

『……すまねえ、脚がやられた』

脚をか……それなってしまうてはもう戦闘は無理だろうな。

『気にするな、後は俺一人でやる』

『……死んだら許さねえからな』

『おう、じゃあ切るぞ』

念話を切り、思考を奴にだけに集中させる。……

「これで周りに誰もいなくなったし俺を見ている者は奴だけになったか……」

俺はあいつらに嘘をついていた。俺は俺達の實力じゃ倒せない、武装隊が来るまで持ちこたえればいいと言ったが、実は倒す方法があったのだ。それは諸事情で隠していた力を使えば可能なのだ。

「これだけは使いたくなかったんだけどな・・・仕方ないか」

この能力は制御が難しく危険過ぎるに使いたくは無いのだがこのままでは俺も、避難している市民も死ぬ運命にあってしまいかもしれない、だから使う。

「おい、お前！」

「ヒヤ？」

「死にたくなければ、全力で防御しろ！俺だってまだ完全に制御が利かないからな」

奴の防御力だったら全力で殴っても死ぬことは無いだろう、だから全力でいく！

「フウ・・・・・・・・」

構えを取り残った全ての魔力を練り、深く呼吸する…………。

（残った魔力からして使える時間は約五秒…………短いが一発あれば十分だ…………いくぞ！！）

「ハアアアーーーーー！！！」

練った魔力を開放する。すると俺の身体を青い光が包み込んだ。

「……………いくぞ！」

そう呟いた瞬間、奴の視界から俺の姿は消えた。

「へ？」

奴が瞬きをし終え、目をあけた瞬間には俺の姿は目の前にいたのだった。

「オラァ！！」

持てる全ての力を使って俺は右ストレートを放った。

「ガハアツ！？」

俺の拳は頑強なシールドを紙を破るかのように突き破り、奴の腹に吸い込まれる。そしてそのまま腕を振り切った。

「オオオオオオオオオオッ！！！！」

「ギヤアアアアアアアアアアア！？」

振り切った腕は奴を吹き飛ばし、約三十メートル程先のビルに激突しようやく止まった。そして力なく手からデバイスも落とし地に伏せたのであった。

「か、勝った……………」

そう確信すると身体を覆っていた青い魔力は消えた。

「うおっと、さ、さすがにこれを使った後じゃ動けないか……………」

「

俺が使った能力とは一定時間の間身体能力が百倍になるというものだ。

この力を知ったのは五才の時だ、この時期に俺は武術を習い始め一人で自主練しているときに、先程同じ青い光が俺を覆ったのだ。どうすればいいのかわからず母さんに電話をしようと携帯を掴んだ瞬間携帯は粉々に砕けたのだ、この時何が起きたのかよくわからなかった。軽く握ったつもりだったのに粉々に砕けたのだ。

この時はまだ制御の仕方わからずどうすればいいのか戸惑ったが一つだけ分かったことがあった、それはこの力は危険な物だということだ。それから直ぐに力は消えて俺は気絶したのだった。

どうやらこの力は魔力を消費して発動するみたいで当時五歳の俺の魔力量なんて微々たるものだったからすぐに切れたのだ。

それからこの力をすぐに母さんに相談した、母さんが言うにはこれはレアスキルという奴らしいが、この力の出所はすぐに想像できた、あのチャラ男のダーツだ。アイツは転生する際に能力をやるとか言ってたからな、これがおそらくそうなのだろう。

「たくつ……使いずらいのをくれやがって、次会ったとき殴ってやる……」

この能力を知った母さんは誰にも言わないようにしる言った。どうしてかと訊いたら教えてくれなかったが何かややこしい事があるのだろう。まあ多分だが母さんはレアスキル持ちだと管理局に知られたら半場強引に局に入れられることを危惧したのだろうな。

まあ、そのこともあってずっと隠してきたのだ、一応ONとOFFの使い分けができるようになってから暴走をすることだけは無いのだが。

「ハア……でも、これで終わったんだ。後は境界が解除され

るのを待つて……」

あ、そういえば助けに来た局員にどう説明すればいいんだ……俺が倒したといったら能力のことがバレてしまいかもしれないし……

と、あれやこれやと考えていた瞬間……
ドンッ

「ガハッ!？」

俺は突如来た衝撃で大きく吹き飛ばされたのだった。

「グウ……!ま、まさか、まだ立てるのかよ……!」

先程まで倒れていた奴は立ち上がりデバイスを構えていた、目は大きく見開き血走っている……これはヤバイな。

「グルアアアアア!」

「ガアッ!？」

奴の放ったスフィアが左腕に当たり爆発した。腕に激痛が奔る、そして腕は血塗れになり動かせなくなった。

「うつ……!」

クソッ……奴はバケモンかよ。

「ガアアアッ!!!」

「ガハッ!？」

何度もスフィアが俺に当たり爆発する、その度に激痛が奔り、俺の身体はボロボロになっていく。何度も気絶しそうになるが、痛みで起こされる。

「ヒヤハハハハッ!！」

くそ……。コイツ俺を嬲って楽しんでやがる……。
。だんだんと意識が遠のいていく、血を流しすぎたか……。

「ヒヤハハッ」

ゴリッ!

頭に何か押し付けられた……。足か。踏みつけんじゃねえよ。
それに眩しいんだよ、何だよそれ、目が霞んでよく見えねえんだよ。

「ヒヤハ、ヒヤハハハハハ!！」

この光、魔力光か、つうことは俺、死ぬのか?ここで……。
はは、二度目の人生も短かったな、十二年か……。ゴメン母さん、帰るって約束果たせそうにないや。

「死ねえーーーーー!！」

そういや、あいつらとの約束も破ることになっちまうか……。
・わりい、先逝くわ。
死を覚悟し目を閉じた、そのとき。

バリイーン！！

「あ？ガアッ！」

結界が破れた。頭を踏みつけていた足はなくなり、その代わりに誰かに抱きかかえられた。何があつたんだ……。？俺はゆつくりと地に寝かせられる。霞む視界の中に金髪の少女を見た。そして彼女は。

「時空管理局本局執務官フェイト・T・ハラオウンです。あなたを逮捕します！」

そう言った、そして俺の意識は途切れたのだった。

｝side fate｝

「あれか！」

全速力で飛んで市街地の真ん中にドーム状の空間が見えてきた。あれが結界か、こんな大規模なものを街の中で発動するなんて……。・とりあえず今は市民の確保を優先にする！

「いくよ！バルディッシュュ！！」

『Yes,sir.Zamber Form』

「撃ち抜け雷神！ハアアアア！！」

結界を破壊して一気に突入する！

『Jet Zamber』

ザンバーフォームのバルディッシュで結界切り裂いた。結界は破れ私の視界に入ってきた光景は犯人と思わしき人物が血塗れの少年を踏みつけながらデバイスを向けていた。先端には魔力が収束されていてすぐにでも撃ち出されようとしていた。

「バルディッシュュ！！」

『Sonic Move』

一気に加速して男性をザンバーの腹で殴り飛ばした。そして血塗れになった少年を保護する。・・・酷い怪我・・・早く衛生兵を呼ばないと。

念話で救護班を呼び、軽い回復魔法をかけて止血だけしておく、これで救護班が来るまでは大丈夫だろう、私は少年をゆっくりと地面に寝かせる。そして・・・。

「時空管理局本局執務官フェイト・T・ハラオウンです。あなたを逮捕します！」

そう言い、こんな酷いことをした犯人に言い放ったのだった。

「ガアアアアアア！！！」

「いくよ、バルディッシュュ！」

『Yes, sir』

許さない、絶対に捕まえる！そつ心に誓い私は駆け出したのだっ
た。

無茶と無謀は違うつてのを理解したよ、この身で……。（後書き）

はい、またもや出してしまいました原作キャラ、しかも主役級の方を……。で、でも執務官だから何かの事件で地上にいてもおかしくないかなと思ひまして彼女、フェイトさんにしました。

でもこれまで投稿した話を見直してみると話のテンポ早すぎですよね？ちよつと急ぎすぎたかな……。改定したほうがいいのか少し悩んでいます。どうすればいいんでしょうかね？

まあ、そのことも考えながら次の話も書いていきますので次回の更新で会いましょう、では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9643w/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS ～転生したら魔法？がある世界だった～

2011年10月8日15時09分発行